氏名（本籍）	REN JINLAI（中華人民共和国） （にん きんらい）
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 166 号
学位授与年月日	2026 年 3 月 23 日
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び広島市立大学学位規程第 3 条第 2 項の規定による
学位論文題目	「木地轆轤に基づく現代的な造形表現の研究」
論文審査委員	主　査　　教授　　大塚　智嗣 委　員　　准教授　　青木　伸介 委　員　　准教授　　城市　真理子 委　員　　准教授　　石谷　治寛

論文内容の要旨

伝統工芸は、長い歴史を通じて人々の日常生活の中に根ざし、深い歴史的記憶や地域特色などを体現されている。この受け継がれてきた技術は単に利用されているだけでなく、制作過程において人と自然の共生関係を築いている。しかし、工業化の発展に伴い、大量生産が伝統的な手作業に取って代わり、伝統工芸は現代社会の急速な発展の需要を満たすことが難しくなっている。多くの伝統工芸は周縁化の傾向を示し、継承者の不足・原材料の減少・安い量産型プラスチック製品・材料コストの上昇、造形の単一化といった困難に直面している。数千年にわたり受け継がれてきた伝統的な木地轆轤技術も、他の多くの伝統工芸と同様に、現代の発展過程において継承と発展の難題にも直面している。したがって、現代社会において伝統工芸の価値を再発見すること、あるいは新たな視点で伝統工芸を再認識し、新たな造形表現を探求することは、重要な研究課題の一つとなっている。

本研究では、伝統工芸である木地轆轤を基盤とし、その歴史的・文化的価値や美的精神を改めて見直すことを通じて、現代的な美術表現における造形の可能性について考察を行った。

本論文の第 1 章では、木地轆轤の歴史と現状を中心に分析を行った。具体的には、出土物および現存資料の検討を通じて、木地轆轤の歴史的発展過程における価値を考察するとともに、木地轆轤と漆芸との関わりに着目し、両者の関係性が有する可能性とその意義について論じた。さらに、こうした歴史的背景を踏まえ、現代における木地轆轤の現状と課題を整理した。そのうえで、具体的な成功事例を分析し、木地轆轤の現代化に向けた転換の方向性を検討した。これらの考察を通じて、木地轆轤による現代的造形表現の重要性を提示した。

第 2 章では、轆轤造形における土と木-その歴史的変遷に焦点を当て、その考察に基づいて回転技術を利用した前衛的な探求の創作事例を展開した。まず、茶人である千利休や古田織部の茶碗を分析の出発点とし、さらに民藝や前衛美術の視点を取り入れ、木地轆轤が時代性の美学意識においてどのように審美的変化をもたらしているかを考察した。その結果、木地轆轤の発展は、最初の実用的な機能から美学の領域へと広がり、現在では物と人との関係を探求する方

向になっていることが明らかになった。

第 3 章では、伝統と前衛の交差点として「もの派」と東洋哲学思想あるいは工芸の接点をテーマに考察を行った。近年、時空を超えて、伝統と前衛の交差は注目的な話題になっている。美術における「類としての美術」の視点から、「もの派」と東洋哲学思想・伝統工芸の間に存在する類似性の可能性を比較・分析する事例があった。この可能性を探ることによって、「もの派」の芸術思想を応用して伝統工芸の現代的創作を行う可能性が示唆され、伝統工芸の存在形式を単なる使用に限定するのではなく、物と人、そして周囲との生成的関係を探求することで、伝統工芸が精神的・文化的価値を再認識することが可能となる。

第 4 章では、「もの派」の創作思想と木地轆轤による現代的造形表現の可能性をテーマとして展開した。「もの派」の芸術創作の方法論を伝統的木地轆轤の制作思想と融合することで、制作面や精神的な類似性と共通点を明らかにする。さらに、これらの共通点を活用し、「もの派」の方法論を自身の創作に取り入れることで、伝統木地轆轤と「もの派」の融合によって、物質と世界の生成的な関係を探求した。最後に、伝統木地轆轤は現代美術の方法論を活かすこと、継承と発展の新たな方向性を見出すことができるとしめくくる。

結論として、伝統木地轆轤は人間の生活に深く根ざしている。歴史的資料と発展の現状を考察するとともに、茶人による「わび茶」の展開や民藝運動の発展を通じて、木地轆轤が豊かな東洋哲学的精神を体現してきたことが分かる。さらに、現代においては、前衛芸術家たちがその伝統的精神文化を継承・融合させながら、新たな造形表現を追求している。こうした歴史的・現代的展開に照らせば、木地轆轤は単なる工芸技術の域を超え、歴史的・文化的価値と美的精神性を内包し、時代の美学の変遷や生活文化との相互作用の中で発展してきたことが明らかになった。また、「もの派」との比較・分析により、伝統木地轆轤と前衛芸術には制作理念上での共通点や表現の類似性が存在し、現代美術の文脈においても新たな展開が可能であることを示す。また、伝統工芸の精神を尊重しつつ現代的視点での再解釈と創作的探求が不可欠であり、木地轆轤は現代美術との接点を通じて文化的・技術的価値を保持しつつ、哲学的・観念的な造形表現へと展開し、東洋と西洋、伝統と前衛、技術と思想の融合を実現し得る新たな方向性を示すことができると考える。

論文審査の結果の要旨

申請者は、宮島轆轤技術の習得を基盤に、中国河北省や石川県での現地調査を行いながら現代における伝統工芸の新たな可能性について地道に研究を続けてきた。特に、宮島轆轤特有の切削道具である鉋の制作においては、造形する形に応じた刃物を自分なりに極める必然性を理解するまでに至ったと考えられる。その傾向は第 1 章で論じたイギリスの「アーツ・アンド・クラフツ運動」や「民芸運動」による手工芸の再評価の影響を意識し、基本的な轆轤技術の向上を目的とした作品により顕著である。この成果は、2 章で論じた自然素材や手仕事の意義に着目し、造形の可能性について実験を繰り返して制作した作品「無一物」（図１）に現れている。研究の中盤では、4 章で論述した「もの派」の李禹煥や菅木志雄らの創作思想と伝統的な木地轆轤との関係性を模索した作品群を展開した。この作品群は思想と自身の制作との関連性に重点を置いており、評価に値する。研究の後半に制作された作品「界」（図２）は、禅宗などの東

洋哲学を基盤とする「もの派」に対して、伝統的な轆轤の可能性を探るという研究の目的を体現しており、式年遷宮にみられるの「常若」の思想を想起させる独自の表現手段として評価できる。以上、論文及び高度な技術に裏付けられた独創的な作品群は、評価できる。よって、本申請における総合審査結果を「合格」とする。